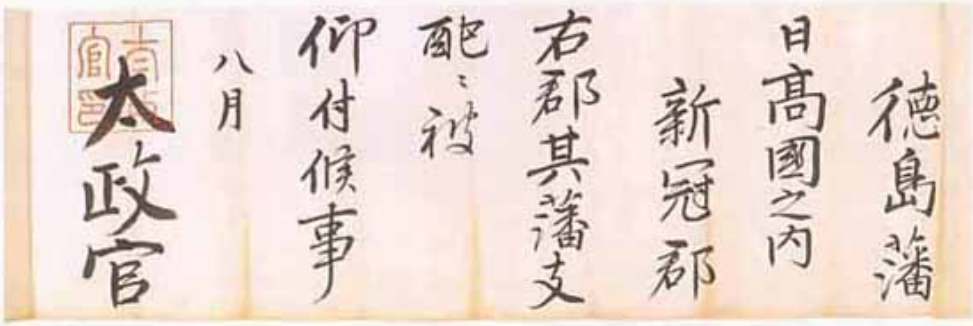
北海道開拓と徳島の人びと

文書館開館十周年記念

展示図録目録用

明治２年「北海道国郡図」（本館蔵）


徳島藩
日高國之内
新冠郡
右郡其藩支
配ニ被
仰付候事
八月
太政官

明治二年
徳島藩への新冠郡への分領支配を命ずる文書
（蜂須賀家文書・本館蔵）

【概説】北海道の開拓と徳島県人

北海道と徳島の歴史的関係は古く、深い。

江戸時代、阿波に隆盛した藍には北海道産の鰊〆粕などの魚肥が不可欠であった。この輸送には蝦夷地と上方を結ぶ日本海まわりの北前船が利用され、阿波と蝦夷地の交流は緊密であった。江戸時代後期に蝦夷地の交易で活躍した高田屋嘉兵衛は、阿波藩の淡路出身である。阿波藩と嘉兵衛との関係は現在のところ不詳であるが徳島と蝦夷地との交流と無関係ではないだろう。

徳島県人で活躍をした嗤矢には、幕末の樺太探検で著名な岡本韋庵がいる。北海道開拓使の判官として樺太開拓に従事する。蝦夷地内の開発を優先する開拓使次官黒田清隆と対立して破れ、北海道を後にしたが、後続する徳島県人の北海道移住に与えた影響ははかりしれない。

明治四年、稲田家臣団が静内地方に移住したのは偶然ではない。明治二年、開国後間もない明治政府は開拓と警護のため各藩に分領支配をおこなったが、徳島藩には日高国新冠郡の支配が命じられた。明治三年には稲田邦植に静内郡と花咲郡志古丹が割譲された。稲田家は庚午事変の処分として静内へ移住させられたのであるが、その背景にはこの諸藩への分領支配策があった。この六十八郡におよぶ分領支配は、大方は形式的な支配にとどまり実があがらなかったが、背水の陣でのぞんだ稲田家臣団の開拓事業は大きな成果をあげた。日高国静内地方に移住した稲田家臣団もまず取り組んだのは藍作であった。

明治二年渡道し、北海道移住事業を推進した麻植郡児島村（現・川島町）の仁木竹吉は、韋庵の著「北門急務」に触発されて、北海道移住を決意し、魚肥の現地調達を目的に北海道での藍作に着手した。仁木に導かれて北海道へ移住した農民たちも道内各地に分散していくが、移住先で藍の種をまき育てた。藍作は徳島県人のよりどころであった。

ところで明治二十五年七月「徳島日日新聞」に、関義臣徳島県知事の徳島県民二十万人を北海道に移住させるという計画案が掲載されている。当時の徳島県の人口は約七十万人、その三分の一に近い膨大な数である。この破天荒にも見える移住奨励策の背景には、基幹産業であった藍業の衰退による徳島県の産業経済の停滞と不振があった。県内に滞留する過剰な人口を新天地北海道に殖民移住させることにより双方の発展を画策するものであった。

関知事の辞職によりこの案は直接的には実現に至らなかったが、北海道の殖民移住策は停滞のはじまった徳島県の経済や産業の打開策としても取り上げられ奨励されていくのである。

明治二十四年に組織された「那賀郡北海道殖民同盟会」は、県内の有力者による殖民移住事業の代表的なものであり、安定的に北海道へ移住させるための組織活動であった。

明治中期以降には吉野川流域の藍作地帯や、県南各地から阿波団体や徳島団体とよばれる農民移住がおこなわれたり、県人によって多数の農場が道内各地に次々と開設されていった。この結果、徳島県はもっとも積極的な北海道移民県として、移住人数では全国十一番目、西日本では香川県と並んで卓越した移住県となった。（明治四十四年「殖民公報」）

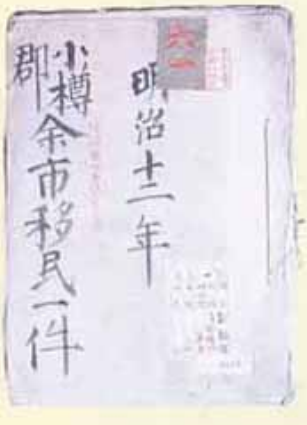
概していえば、徳島県人の北海道移住は、特に開拓初期の段階において質量とも大きな役割を果たしたといえる。先述したもの以外にも、興産社をはじめ北海道各地における製藍事業、日本屈指の大農場となった蜂須賀農場、北海道新聞の元を築いた阿部興人や阿部宇之八をはじめ、各分野での徳島県人の奮闘ぶりには目を見張るものがある。その積極的な活動は「起業精神」に満ちており、明治初期の活力のあった時代の徳島県人の意欲的エネルギーを彷彿とさせる。

このほか、明治三十五年七十二歳の高齢で北海道開拓に乗り出した医師関寛斎や、レンガづくりで活躍した久保兵太郎、「五反ならし運動」の中林ナカなど、新天地北海道にあらたな活動の場をもとめた人物も多い。

また道内には、県内徳島で失われた貴重な徳島の近代史資料が残されていることも調査が進む中で明らかになって来ており、これからの解明が期待される。

この意味で北海道と徳島の移住や交流の歴史を考えることは、近現代の徳島を見直すための非常に重要な資料や視点を提供してくれるといえるだろう。

（西野・多田家文書、本館蔵）



（北海道立文書館蔵）

関知事の北海道移住策を掲載した新聞記事（明治二十五年）

ごあいさつ

平成二年に開館されました徳島県立文書館は、今年平成十二年度、十周年を迎えることとなりました。この間、県民の皆様方のご指導ご支援をたまわり、お育ていただきましたことに対しまして深く感謝申し上げます。

そして、この度、十周年を記念いたします展示「北海道開拓と徳島の人びと」を特別展として開催することになりました。第二十回企画展もあわせて実施させていただきました。

北海道は、今、移住四世の時代に入っており、本館へも開館以来、多くの方々が自らのルーツ探しにおいでになっております。このことから、逆に徳島から北海道を照射いたすべく、平成九・十年度の二か年間、徳島県人の北海道移住関係資料調査を行ってまいりました。また平成十一年度には、それらの調査の成果をもとに、資料紹介展「徳島県人の北海道移住」とシンポジウム「北海道開拓と徳島県人」を開きました。

明治四年の稲田家臣団の静内移住にはじまり、阿波藍を北海道に導入し、藍づくりを成功させた仁木竹吉や鎌田新三郎、旧藩主蜂須賀茂韶の拓いた蜂須賀農場、各地に開設された県人による開拓農場、明治二十五年には徳島県知事関義臣が、当時の徳島県民六十九万人のうち四万戸、二十万人を十年かけて北海道に移住させようとした計画すらありました。また北海道を基盤に北蝦夷地(樺太)の開拓を志した岡本韋庵、北海道新聞の前身をひらいた阿部宇之八、七十二歳の高齢にもかかわらず、自らの信念のもと理想郷を実現すべく北海道に渡った関寛斎、そして原野に挑み切り拓いていった多くの県人、或いは余儀なく退いていった人たち、西日本最大の移住県であった徳島県の姿が浮かびあがってきました。それは、実に忘れていた徳島の近代史の一面であります。今回の特別展は、その徳島近代史の欠如を補完するものでもあります。

私事ですが、私は文書館に着任する少し前、平成十一年の一月末に初めて北海道に行く機会を持ちました。県立池田高等学校の生徒達をスキー修学旅行に引率したのです。機上から壮大な北海道の白い大地を眺めたとき、まだまだ日本にはこんなに広い土地があるのかと感嘆したことを覚えております。その北海道はいま有珠山の噴火や地域経済の問題などで厳しい状況の中にあると聞きます。北海道に寄せるこの展示は、北海道を切り拓いた方々の辛苦や喜びに思いをはせるとともに、明治以来強い結びつきを持っていた北海道への徳島県民からのエールとなり、再びその絆が深まればと考えております。

このたびの特別展につきましては静内町・仁木町・雨竜町・陸別町・本別町を始めとする徳島県人の移住に関わる多くの市町村、各関係諸機関、千葉県東金市立図書館、またなによりも移住をされた子孫の皆様方から多くの資料や情報をお寄せいただきました。さらに、この特別展・北海道移住関係資料調査全体を徳島大学の平井正午先生に監修ご指導していただきました。皆さま本当にありがとうございました。

平成十二年八月五日

徳島県立文書館長　**逢坂俊男**

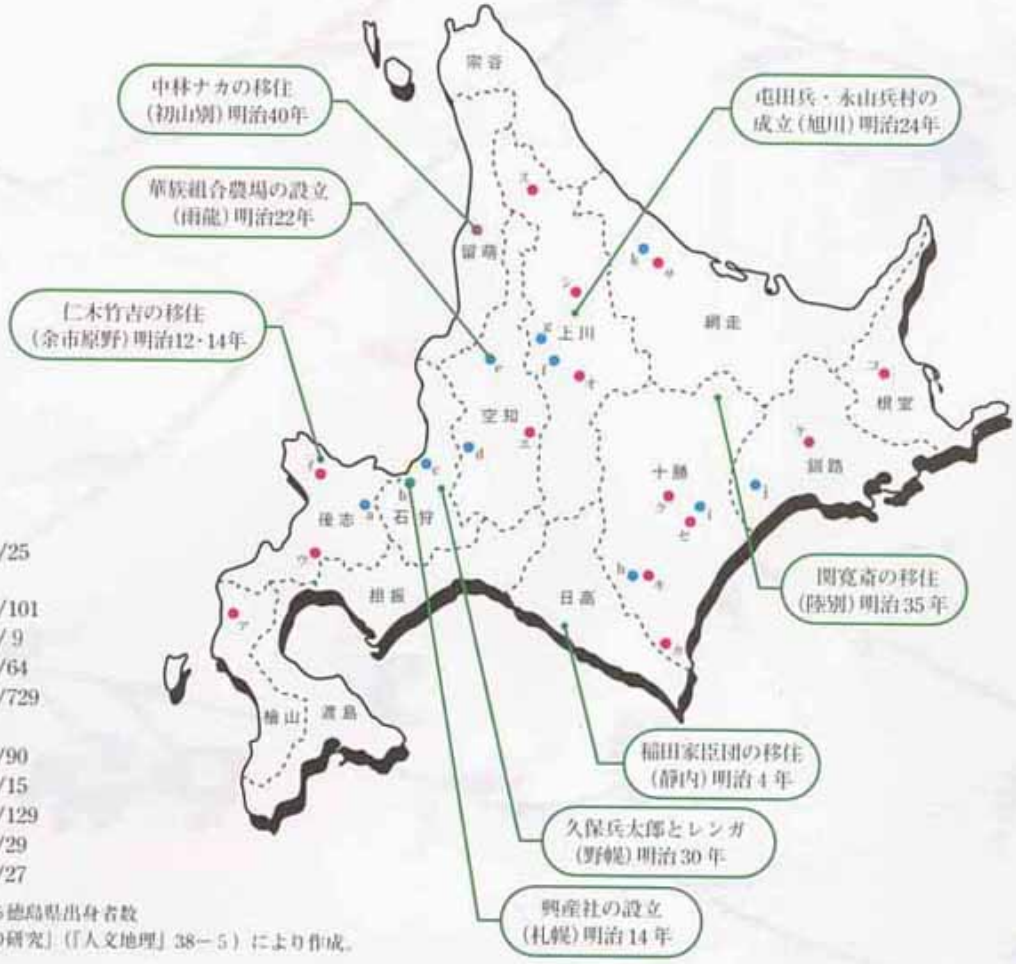
●自作団体移住

ア	(徳島団体)	明治24年	70戸
イ	(関井団体)	明治19年	52戸
ウ	阿波団体	明治40年	?戸
エ	阿波団体	明治40年	?戸
オ	阿波団体	明治28年	数戸
カ	(徳島団体)	明治30年	31戸
キ	徳島団体	大正8年	19戸
ク	徳島団体	明治45年	?戸
ケ	徳島団体	大正4年	60戸
コ	徳島団体	明治44年	40戸
サ	余市団体	明治29年	22戸
シ	恵比須団体	明治23年	?戸
ス	徳島団体	明治36年	32戸
セ	南海社	明治25～29年	113戸

●小作農場

a	赤井川農場 合資会社農場	明治31年	23/25
b	谷農場 (元興産社)	明治44年 (明治15年)	67/101
c	増田農場	明治25年	2/9
d	友成農場	明治25年	44/64
e	蜂須賀農場	明治26年	74/729
f	佐坂農場	明治30年	
g	宮越農場	明治26年	32/90
h	十一農場	?	9/15
i	利別(板東)農場	明治30年	125/129
j	木村農場	明治41年	27/29
k	岩田農場	明治29年	14/27

(注) 1. 分母は農場在住者総数、分子はうち徳島県出身者数
2. 平井松午「徳島県出身北海道移民の研究」(『人文地理』38－5) により作成。



移住の先駆けとなった稲田家の静内移住

徳島藩の筆頭家老で洲本城代であった稲田家が庚午事変の後、北海道の静内へ家臣団共に移住したことはよく知られている。

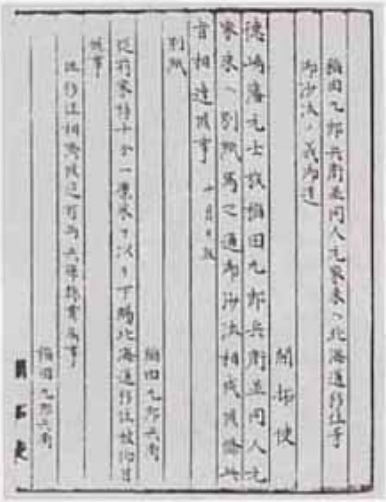
稲田家が北海道に移住することを明治新政府から命じられたのは、明治三年(一八七〇)三月二十一日岩倉具視によってであった。稲田家の家臣が家老の家臣であるため、討幕運動で抜群の活躍をしたにも関わらず、多くが士族に編入されなかったために不満が募り、それが分藩独立運動にまで発展してしまい、岩倉具視にその嘆願をしていた。そこで岩倉は、士族編入を認めるかわりに稲田主従の北海道移住を命じたのである。それに対して稲田家臣側は再び嘆願書を出し北海道移住を拒否し、さらに淡路の分藩を願い出るなどしたため、徳島藩兵の強い反発を誘い十四日には大坂の稲田屋敷、五月十五日には洲本の稲田家来の屋敷町を襲い死者が出るなどの惨事(いわゆる庚午事変)を引き起こした。徳島藩兵隊有志には、八月に太政官から判決が下り、斬罪十名外多くが罪を問われた。また知藩事の蜂須賀茂韶も監督不行届と言うことで謹慎を言い渡された。また稲田家家臣達も、この事件後士族籍を得るものの再び北海道移住が命じられたのである。

北海道立文書館が所蔵していいる中心的な記録公文書である「開拓使公文録」には稲田主従の関係文書が多く出てくる。その始めは、同年十月「稲田九郎兵衛並同人元家来へ北海道移住等御沙汰之義御達」で、兵庫県眷属稲田九郎兵衛(邦植当時十五才)に日高国の静内郡と志古丹島(千島列島の一つ色丹島)の開拓を命じた事を記した文書である。その開拓費用は元の知行高一万四千五百石の十分の一を与えられ、残りを十年間分の開拓費用に充てることが書かれており、決して悪い条件ではなかった。

稲田九郎兵衛（邦植）

静内郡・色丹島の土地は、それまで東京芝の元将軍徳川家の菩提寺であった増上寺が管轄していたが、拓植には見るべき成果を上げることがなかった。そこでそれを引き揚げさせて、実際に移住して開拓にあたることを前提にする稲田家の支配地に変えたのである。

静内の土地には江戸時代後期に静内場所が置かれ、昆布・鰊・鮭・鱈・鹿皮などの産物が安定して産出されている土地で、特にシブチャリ川(静内川)両岸には平地が広がり、稲田家が調査に送った重臣の内藤弥兵衛・平田友吉の二名も将来極めて有望なる土地であることを認め報告している。



開拓使公文録
(北海道立文書館所蔵)

翌明治四年二月先発隊四十七人(三十人とあるものもある?)が二手に分かれて出発し、一方は大阪から越前敦賀に出て日本海の航路を北上して函館に入り陸路静内に入ったといい、もう一方は東海道を経て陸路青森に至り大湊付近から海路静内に直行したという。後続の移住者本隊は、同年四月に三艘の汽船に米・麦・農具・家具などを満載して洲本を発ち品川・金華山を通り太平洋航路を北上し五月二日ついに静内(現在の元静内)に上陸した。この第一陣は百三十七戸五百四十六人であった。

一方、同年三月十五日太政官は、静内郡のとなり新冠郡の支配を稲田九郎兵衛の増支配としている。この新冠郡は、明治二年七月から徳島藩が支配していた場所で、徳島藩の役人が詰めていた。それを稲田家に支配を与えたのである。増上寺と同じく一向に成果があがらない徳島藩の支配から、実効のありそうな稲田家に支配替えを行ったのだろう。

実際に上陸した入植者達は、まったく耕作の手が入っていない静内の原野に驚きを隠していない。元々住んでいたアイヌの人たちはシブチャリ川(現・静内川)沿岸に住み鮭や鹿肉などを常食するのみで耕作するものはなく、まず原野に道路を開くところから始めなければならなかった。下々方(しもけぼう)から稲田家の屋敷が作られる目名(めな)に通じる道が開削され開拓の端緒がつけられた。その後侍農業で開拓はなかなか進まず、七月には火事で国元から運んできた家財道具のほとんどを焼いてしまったり、八月には紀州(和歌山県)周参見浦(すさみうら)沖で第二陣の移住者が乗った平運丸が難破し八十三名が死亡するという大きな悲劇が起こった。

こうした悲劇や苦労を乗り越えて、静内でも徐々に開拓はすすみ米作に成功し、徳島の産物である藍の生産を行い、静内開拓の礎を築くに至ったのである。また現在の静内・新冠と言えば、競争馬の国内有数の産地として有名になっている。こうした牧場経営者にも移住者達は大きな役割を果たしたという。

稲田九郎兵衛(邦植)への北海道移住の達

参考文献

北海道稲田会「先人を偲び」平成元年

静内町史編さん委員会「静内町史」昭和五十年

平井松午「北海道への士族移住とその定着状況」(徳島地理学会論文集　平成八年)

岡本韋庵と北蝦夷地（樺太）開拓

初期の北海道開拓に大きな足跡を残した県人に岡本韋庵（文平・監輔）がいる。韋庵が樺太に興味を持ったのは、徳島の岩本贅庵や高松の藤岡三渓に師事したころに北蝦夷地（樺太）の話を聞き、文久元年（一八六一）二十一才の時、江戸に出て間宮林蔵の「北蝦夷図説」に触れたことによるとされている。当時の樺太の状況は、安政元年（一八五四）十二月に結ばれた日露和親条約で日本とロシアの国境を分けない雑居地となっていた。

北辺の防備に強い関心を持った韋庵は、文久三年（一八六三）六月に単身で樺太南部を探検し、十月に箱館に帰り、また翌元治元年（一八六四）四月には許可を得て東岸タライカ湾（テルペニエ湾）内のタライカ付近を中心に再調査し、南部で越冬している。さらに慶応元年（一六八五）五月には三度目の調査として、幕命を受け西村伝九郎を伴って樺太奥地に入り、東岸を北行し六月二十五日に北端のガヲト岬に達して「日本領、岡本文平建立」の標を立てたとされる。その後西岸を南下し、黒龍川河口などシベリア東岸を含めて十一月に日本人として初めて樺太全土を調査を完了し、当時の箱館奉行杉浦兵庫頭に意見書を提出している。

翌二年（一八六六）京都に帰り、山東一郎らと「北門社」を結成して北地開発の急務を説き、三年（一八六七）には「北蝦夷新誌」という樺太の地誌を刊行している。また、明治維新後の北海道経営の中心的な役所、箱館裁判所の総督となる清水谷公孝家に寄寓し、土佐藩の坂本龍馬に北地開発意見書を陳情するなど活発な活動を行っている。

明治元年（一八六八）四月韋庵は、箱館裁判所従五位権判事に任ぜられ樺太全島一切の開拓事務をまかされ、京都から敦賀経由で箱館に赴いた。六月には農耕民二百余人を率いて外務大丞丸山作楽とともに、樺太南岸のアニワ湾内のクシュンコタン（久春古丹大泊）に入り、公議所を置いて樺太開発を強化して行ったが、入植当時から南樺太の雑居化を計ろうとするロシアの中佐テフラートとの交渉に苦労していた。翌二年六月には、ロシア軍が樺太に上陸し函泊を占領するという事件が起きるなど、ロシアとの交渉は困難を極めていた。

七月明治政府は北海道に開拓使を置き、韋庵も判官となり一時箱館に戻っていたが、九月には農工民四百人を率いて再び樺太へ渡って行った。翌三年（一八七〇）一月には丸山作楽が函泊でロシア側と交渉を持つが、妥結しないなど厳しい状況は変わらなかった。二月には明治政府によって樺太開拓使が置かれ、ロシアとの交渉を強化しようとするが、一方で北海道の開発を優先する樺太不要論も出てきていた。

対ロシア問題とともに五月から北海道開拓使次官となった黒田清隆は、同時に樺太の専務となり同地の視察を行っている。十月帰京した黒田は韋庵とは意見が合わなかったのか、北海道・樺太開拓に関する建議を行い（いわゆる「十月建議」）、樺太放棄論を唱え、明治政府の北方政策に強い影響を与えた。同じころ韋庵は免職願いを提出し認められている。翌四年（一八七一）三十二才の時、春三月を待って樺太を引き揚げ札幌に戻ることになった。七月には開拓使御用係となり札幌に滞在し、「窮北日誌」「北門急務」という樺太開発の必要を説いた本を執筆するが、樺太の地を訪れることはなかった。その後政府の方針も樺太放棄論に傾き、九月には樺太開拓使が廃止され、ついに明治八年には千島・樺太交換条約によって、樺太を全面的に放棄することにいたった。

韋庵はその後教育界において多くの業績を残すことになるが、明治二十五年には千島列島の開発を目指して「千島義会」を興すなど、青年時代の北地開発の夢は晩年まで持ちつづけた。

幕末北蝦夷地経営図

『新北海道史』第二巻より引用。（　）内は場所請負人

岡本　韋庵

（1839～1904）

徳島から北海道へ

政界・実業界に揺るぎない治績

阿部　興人

幼名・金兵衛　字・士譲

（一八四五～一九二〇）

北海道実業界で活躍した頃
（『阿部宇之八傳より』）

一八四五（弘化二）年、板野郡木津村長江新田（現・鳴門市大津町）で、阿部猪蔵の五男として出生。十六歳の時、藩士で叔父・岸蔵の養子となる。政局の激しくゆれ動く維新の世にあって、儒者柴秋村、新居水竹らに学ぶとともに、やがて藩に出仕、小奉行に抜擢され藩政の難局に立ち向かい、そのすぐれた才覚によって時代を見通し、指導的役割を果たした。

一八七〇（明治三）年、庚午事変に連座（終身禁固）したが、許されたのちは県の役人として治水問題などに奔走した。その後、美馬郡長、名西郡長、県議会議員を勤めつつ、中央にあっては大隈重信・前島密らと親交をもち、県内においては田村英二・吉田熹六らと謀り一八八二（明治十五）年、改進党徳島支部を結成。党員徳島県の十郡に及び、県会議員の入党あいつぎ、改進党地方部設置のさきがけとなり、憲法制定、国会開設をめざした自由民権運動の先駆者となった。

一方、北海道開拓にも早くから強い関心を寄せ一八七八年のころ入植地選定のため渡道し、その帰途、東京で農具の注文や技手らを雇い入れる手配をしている。一八八一年、実兄滝本五郎と北海道開拓の目的で徳島興産社をおこし、社長となった。翌年、五郎は北海道篠路村に二百七十万坪の未開地払い下げを受け十七人の耕夫とともに郷里を出発している。

青年時代の阿部興人
写真左より、益田永武　大村純安　阿部興人
南　堅夫（『阿部宇之八傳より』）

興人は、その後大蔵省地方財務課長兼官有財産課長、大阪市助役などを勤めるが、一八九〇（明治二十三）年には北海道セメントを設立して社長となり、また同年の第一回衆議院選挙に徳島第五区より立候補して当選（以来、改進党に所属して代議士生活十二年）。また、郵便報知新聞（改進党系）社長、日清戦争時の衆議院予算委員長、函館船渠会社の創立、近藤廉平らと北海道胆振国虻田郡に七百十五町歩余の組合農場の合同経営、函館鉄道株式会社・渡島水電株式会社（後の函館水電）などなどを経営。とくに北海道セメントは日露戦争の好景気で資本金を七十二万円とし、新鋭の大型複式回転窯二基を輸入、年産四十万樽を製造、ウラジオストックにまで輸出するにおよんだ。

一九一〇年には函館水電は資本金を倍額にして第二発電所の工事に着手、また函館馬車鉄道株式会社を買収して電気軌道をも兼営した。

こうして阿部興人は、役人として、政治家として、また実業家として、明治期の徳島のみならず北海道の開化と発展に大きな足跡をのこしている。その生涯は今も、郷里徳島と北海道とを固く結ぶ絆（きずな）となっている。

なお、一八九一年、著書『財政始末』を刊行（明治元年以降の歳入歳出額を累計積算して、その原由を明らかにした）したことは有名。

一九二〇（大正九）年、東京大森の自宅で死去、七十六歳。

新聞人として生きる

社説で北海道民の世論をリード

阿部宇之八

（一八六一～一九二四）

新聞人・ジャーナリスト
（『阿部宇之八傳より』）

阿部宇之八は、一八六一（文久元）年、板野郡木津村（現・鳴門市）で滝本五郎の長男として出生。十四歳にして、叔父・阿部興人の養子となる。

旧制徳島中学校に入学、上京して三菱商業学校、さらに慶応義塾に学び、一八八一（明治十四）年帰郷。阿部興人の娘・恒と結婚。その翌年、大阪新報の記者となり、さらに大阪毎朝新聞の論説記者として将来を嘱望されたが、実父・滝本五郎と養父・阿部興人が北海道篠路村に二百七十万坪の土地の払い下げをうけて開墾をはじめたことから一八八六（明治十九）年に渡道。当初、北海道庁の官吏となったが、その冬、郵便報知新聞社の募集する懸賞論文に応募、論題「国税・税法大改正案」が一等に当選。そして、翌八七年、山田吉兵衛の経営する北海新聞および札幌印刷所を含めその経営を託されることとなり、紙名を北海道毎日新聞と改題し、再び新聞人として活躍することとなる。

一八九二（明治二十五）年、札幌市街の大火によって社屋、印刷所を焼失するという災難もあったが、その熱意によって復興なり、北海道の開化と発展のために数々の論説をかかげ世論をリードする役割を果たしたことは特筆される。編集指標に北海道開拓の促進、教育の振興などをかかげ、自らも健筆を振るった。

一九〇一（明治三十四）年、北海道毎日新聞、北門新報、北海時事の三社が合併して、北海タイムスとなり、宇之八はその理事となるが、この三社合同の背景には、北海道における政友会の地盤確立への動きがあったといわれ、道議会設置につながる地方自治への強い執着があったといわれる。

北海道立図書館に所蔵されている「阿部家文書」には、阿部父子の往復によるものをはじめ、大隈重信、前島密、尾崎行雄からの書簡、阿波自由党の井上高格、新居敦次郎、曽我部道夫、吉田熹六、橋本久太郎、益田永武などからのものがあり、立憲政体の樹立に奔走した自由民権運動家との交流が伝えられている。

なお、阿部宇之八は北海道での業績が評価され、一九一三（大正二）年には第八代目の札幌区長に就任した。また、一九二四年、札幌で六十四歳の生涯を閉じたが、宇之八の北海道新聞界での業績は、その後、子息たちによって継承され今日におよんでいる。

阿波藍と北海道

徳島県人が新天地北海道の開拓にあたって大きなよりどころとしたものは藍作・製藍事業であった。

藍はいうまでもなく徳島の特産品であり、江戸時代から明治のはじめにかけて阿波の基幹産業として発達し地域の産業経済を支えた。灌漑用水を必要とする米作りが道内に普及するのは、明治中期以降であり、北海道開拓の初期における農業の主体は畑作農業であった。この意味では畑作農業である藍作を得意とした徳島県人にとっては、藍業は北海道開拓に取り組む大きな武器にもなった。

藍作にはじめて取り組んだのは、庚午事変の後、日高の静内地方に移住した稲田家家臣団であった。明治四年、六月静内郡において葉藍が試作され、明治十二年より本格的に藍の製造に乗り出した。北海道の開拓に力を注ぐ開拓使は、殖産興業策の一環として藍業にも注目し補助金などにより支援した。

一方、岡本韋庵や稲田家の影響を受け北海道への開拓移住を画策していた仁木竹吉は、明治八年「殖民ノ儀ニ付願」を開拓使に提出した。その文中には、阿波における藍作の難渋が魚肥の高騰による圧迫によるとして、鰊〆粕の生産地である北海道において藍作を行うことを移住の理由にあげている。

明治十二年仁木竹吉は、徳島県の麻植・美馬・三好の農民百十七戸三百六十余人を余市原野に入植させ、翌十三年はこの地において藍作を開始した。竹吉はこの後も徳島県人の移住の手引きを行い、仁木村は徳島県人の移住センターの様相を呈していた。移住民は仁木村が手狭になると各地に転住していった。

有珠郡紋別に移住した鎌田新三郎も、藍作と藍の製造に着手し、数年たたずしてすくもの製造に成功している。

魚肥の高騰は、阿波藍に従事するものがいだく共通の難題であった。明治十二年藍商による「開拓使ニ撫養出張所設置ノ建言」も開拓使の出張所を徳島におくことで、北海道産の魚肥を安価に安定して手にいれるための方策であったといえる。この建言は実現されなかったが、北海道に生産地を移しての藍づくりは積極的に促進されていった。

板野郡長江村(現・鳴門市大津町)出身の滝本五郎は、北海道に移住して大農法による農場開拓を目指し、明治十四年、実弟阿部興人と組んで徳島興産社を設立した。同十八年には札幌郡篠路村の興産社農場に製造所を設けて蓼(すくも)の製造に乗り出した。興産社は利子補給の特典を受ける保護会社となり、北海道庁の支援を受けながら、製藍事業を進めた。同二十八年には製藍高四万三千貫に達し、北海道藍は本場の阿波藍を圧迫するほどであった。しかし全国の伝統的な製藍業が化学染料の合成藍に押されて衰退していく中で、明治三十年には事業の中止を余儀なくされていった。

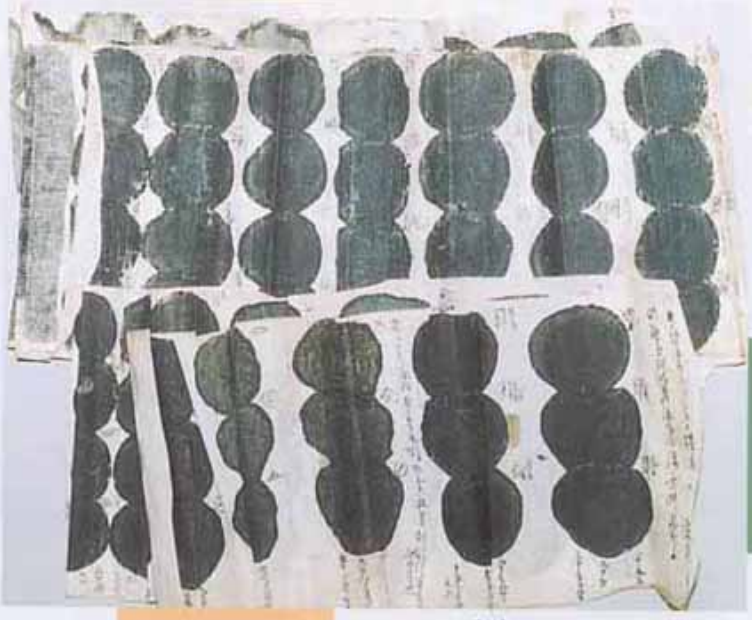
現在、民芸ブームの中で伝統的な藍染めが見直され、壊滅状態にあった藍が復活しているが、北海道では本県出身の篠原家が伊達市で今も藍づくりを続けている。

また現在の札幌市北区篠路町の「あいの里」は、興産社の藍を地名のゆかりとしている。

徳島県人の移植した阿波藍が今に生きているのである。

滝本五郎

(1836～1899)



北海道藍の「手板紙」明治13年(壮瞥町郷土史料館蔵)

仁木竹吉

(1834～1915)

那賀郡北海道殖民同盟会と移住事業

明治二十四年以降徳島県は、全国の府県の中で常に十位前後を占めるような主要な北海道移住県となっていった。その要因には経済的な面もあるであろうが、県内の有力者による積極的な移住組織の創設や農場設置を挙げることができるだろう。

明治二十四年(一八九一)春、那賀郡の北海道開拓に関心を持つ有志が集まり「那賀郡北海道殖民同盟会」が組織された。殖民同盟会の目的については「近年徳島県人の北海道移住者は増加しているが、開拓の目的を達成している者は数少ない、これは状況を調査せず軽挙に移住をするからである。有志の人これを嘆き移住民の不幸を救済するために殖民同盟会を組織する。」(「徳島日々新聞」・明治二十四年十二月十三日・筆者意訳)とあり当時の無秩序な移住の状況を嘆き、組織として移住を奨励していくために会を組織したことを述べている。この会には、当時衆議院議員であった守野為五郎(現那賀川町)や県会議員でのちに守野に代わって衆議院議員になる板東勘五郎(現羽ノ浦町)、県会議員でのちに県会議長も務める小笠原鶴太郎(現羽ノ浦町)など那賀郡内の実力者十一人が名を連ねていた。

友成　士寿太郎
(1885～1918)

殖民同盟会で委員をしていた友成士寿太郎は、一念発起して羽ノ浦町役場助役の職を辞し三月に北海道開拓の状況調査に出発した。道内を広く踏査した上で、七月二十九日札幌から上川街道を北東へ十二里(約四十八キロ)石狩川沿いの石狩国樺戸郡月形村キウスナイ(黄臼内)(現・浦臼町)に二百五十万千二百七坪(約八〇三㌶)の土地を貸し下げを受けることに成功した。

士寿太郎は、急いで徳島へ帰り那賀郡北海道殖民同盟会に状況を報告し、那賀郡の人々を中心に町村の役場等をまわって移住者を集めはじめた。また、那賀郡北海道殖民同盟会は明治二十四年十二月の新聞に数日間にわたって大きな広告を掲載している。その広告には「明治二十五年から二ヶ年で二百戸の農民を移住させること」を目標に、「移住者には二度に分けて一万坪(約三・三㌶)を配与し、成功した後、所有権を与えること」を約束している。また条件として、「渡航費及び移住後一ヶ年の衣食費に耐える資力のある者、目的を変えず当会の規則を厳守する者」としており、渡航費と生活費は自分で用意しなければならなかったことがわかる。この募集により明治二十五年四月には三十戸を集め北海道に旅立った。しかし現地の状況にそのうち十六戸が離散してしまうほどであった。

その後十四戸によって開拓は苦労を伴いながらも進み、明治二十五年十二月には第二回、明治二十六年十二月には第三回の移住者募集のために士寿太郎は徳島に帰っている。二十六年には四十一戸、二十七年には十三戸が新しく移住し、明治三十年には移住者は百七十一戸に達したとされている。殖民同盟会も活動は継続しており、二十六年二月・二十六年十二月にも移住者募集新聞広告を掲載している。

守野　為五郎
(1851～1906)

また、有力な会員であった守野為五郎家には、明治二十八年二月の開墾地に関する報告書が残されており、二百五十万坪の内百二十七万坪を分与し、三十万坪は牧場に、二十万坪は防風林・薪炭林として残し、残地は七十三万坪余りになっている。開墾地では、大豆・小豆・粟・稲黍・ソバ・タバコ・タマネギ・ジャガイモ・米などの産物が生産され、土木事業によって堤防や橋などの施設も整備されたことがわかる。

さらに守野家には、明治二十八年十二月に月形村内に作られた公立徳島尋常小学校に対して建築費を出したときの感謝状が残されている。徳島小学校は、明治二十八年に移住者数名が集まって寄付金を募り、二十四坪の校舎を建てたものが始まりで、故郷の名を取って徳島小学校と名づけられたとされている。守野家の感謝状もこの時のものだろう。

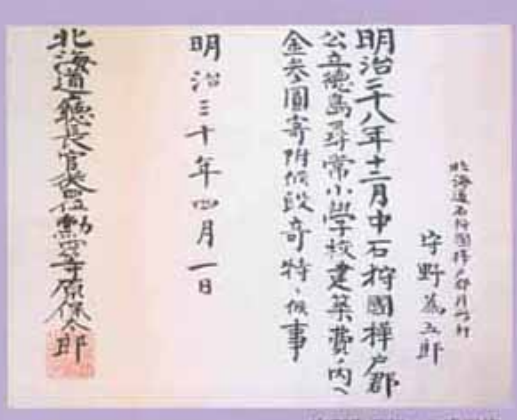
その後、明治三十三年に編纂された「北海道殖民状況報文」によれば、二十八年以降は新しい移住者に対して渡航費と生活費を貸し付ける制度ができ、二十九年以降には富山・香川・高知県の人々も移住してくることになり、三十二年には月形村から分村した浦臼村に含まれることになり、水田の作付成功もあって順調に開拓が進んだ。三十三年の友成農場は二百二戸耕作面積七百七十一町歩(七七一㌶)からなり、うち四百七十町は百九戸の移住者に付与され、移住者の平均耕作面積は四町歩に達する成功を治めた。状況報文でも成績顕著と認めている。

板東　勘五郎
(1861～1918)

那賀郡北海道殖民同盟会の板東勘五郎はこのほかに、二十九年に石狩国空知郡栗沢村(現・栗沢町)、三十年十勝国中川郡蝶多村現・池田町)、同じく三十年十勝国中川郡勇足村(現・本別町)・小笠原鶴太郎も組合員で支配人は元那賀郡立江村長東条儀三郎であった、利別農場(現・本別町)など多くの民間農場を経営している。那賀郡北海道殖民同盟会が掲げた徳島県人を安定・安心して北海道へ移住させるという目的は達せられたと言えるのではないだろうか。

参考文献　中村英重「北海道移住の軌跡」(一九九八・一〇)
河野常吉編「北海道殖民状況報文　石狩国」(一九八七・二)
友成家編「友成家三代、渡道百年のあゆみ」(一九九〇・一〇)
勇足青年学級生編「勇足の歴史」(一九六三・二)

友成士寿太郎の報告書



明治三十八年十二月中石狩国樺戸郡
公立徳島尋常小学校建築費内へ
金参圓寄附候段奇特ニ候事
明治三十年四月一日
北海道庁長官
守野為五郎

守野為五郎への感謝状

設立当時の蜂須賀農場（北海道大学付属図書館北方資料室蔵）

蜂須賀農場の設立

明治十九年「北海道土地払下規則」が公布されると、大土地所有の道が開かれ、華族や政商・官僚・豪農たちは競って大農場の開拓に乗り出した。

明治二十二年、公爵三條実美と侯爵蜂須賀茂韶・菊亭修季の三人は、協同して雨龍郡に一億五千万坪の大土地の貸付を出願し許可された。

三条らは華族組合雨龍農場を設立して、アメリカ式の大農場経営による開墾を試みたが軌道に乗らず、明治二十四年三条の死を契機に二十六年解散した。この後中心人物であった蜂須賀茂韶は、新たに約六千町歩（耕宅地約三千町、山林三千町）の官有未開地の貸し下げを受け、蜂須賀農場を開設した。はじめ直営方式をとっていたがうまく行かず、明治三十年には小作制に転換し、農場の小作人を徳島県をはじめ各地から募集した。

農場管理者には徳島出身の滝本五郎や長井新吉が就任し、阿波・淡路より小作人百二十戸が入植するなど、当初の農場の開墾や運営には徳島県人（阿波衆）の役割が大きかった。しかし明治三十年、四国からの北海道移民を乗せた依姫丸での虐待事件や自然災害による凶作がおこったため、徳島からの移住者は激減、かわって当時最大の供給地であった富山県から募集し、次第に増加していった。

作物は、はじめ小豆・大豆・小麦などの雑穀や飼料が中心であったが、次第に米作に転換し、明治三十年代の後半には経営収支は黒字に転じて経営規模を拡大し日本における代表的大農場にまで成長していった。

しかし、同時に小作料をめぐる問題も次第に表面化し、大正九年、蜂須賀農場で最初の紛争がおこったのをはじめ、全国的な小作争議の激化にともない、昭和七年頃まで争議頻発した。

昭和二十二年、農地解放により、蜂須賀農場は解散し、現在にいたっている。

蜂須賀　茂韶
（1846～1918）

蜂須賀農場で使用された印章（雨龍町役場蔵）

徳島より分霊された蜂須賀家政を祭る雨龍神社

理想郷を求めた関寛斎

（一八三〇～一九一二）幼名豊太郎、のち務、寛斎、寛、号白里

関　寛斎

徳富健次郎（蘆花）作「みみずのたはこと」の中に、「明治四十一年四月二日の昼過ぎ、妙な爺さんが尋ねて来た。北海道の山中に牛馬を飼って居る関と云う爺と名のる。鼠の目の様に小さな可愛い眼をして、十四、五の少年のように紅味ばしった顔をして居る。長い灰色の髪を後ろに撫でつけ、あごに些の疎髯をヒラヒラさせ、木綿ずくめの着物に、足駄ばき。年を問えば七十九。強健な老人振りに、主人は先ず我を折った。」と出ている。その後、肝胆相照らした二人の親交はすすみ、明治四十三年九月二十四日、網走線が陸別まで開通するのを待ちかねて、蘆花は妻愛子、娘鶴とともに斗満の関寛斎を尋ねている。

関寛斎の何が、どこがかくも文豪蘆花を魅了したのであろう。蘆花のみならず、今日に至るまで多くの人々の心を引きつけてやまないのは何故なのであろうか。彼が、「骨も身もくだけて後ぞ心には永く祈らん斗満の賑」と辞世に詠った陸別には、北を指さす「関寛翁像」が中央公園にあり、青竜山には「関寛翁碑」が、そして陸別駅舎に関寛斎資料館がある。またわずか二歳の時に死別した亡き母を死の直前まで慕いつづけ、「嬰児が泣く度毎に思うかな負われし時の母の面影」と詠った千葉県東金市の中央公園には、静かな意志を秘めた姿の「関寛斎翁之像」があり、文久二年から明治三十五年まで四十年間住み、御典医として、町医者として活躍し、のち陸別にありて、「世の中を渡りくらべて今ぞ知る阿波の鳴門は浪風ぞなき」「秘め置きて楽しみとせし鯛味噌に心は戻り鳴門にぞゆく」と感慨した徳島には、城東高校内に「慈愛進取の碑」があり、福島川河畔には医学書を抱えた若き「関寛斎先生」像がある。日本の三か所で、その全人生に渡って顕彰されているのは、人間としての関寛斎の生き方に、人々が感銘を受けるからであろう。

養父関俊斎の志「およそ人生きてはまさに常に世に裨益するを志すべく、死しては速やかに朽ちるにしかず」を受け継ぎ、「人以苦楽為本」と辛苦を厭わず、人のため、弱者のために尽くすことが、自らの人間的完成と考えていたのであろうか。

明治三十五年四月十四日、関寛・あい夫妻は徳島を出立、はるかな北の大地をめざした。寛斎は七十二歳、もはや楽隠居の年齢であり、なお徳島で医業をつづければ、財産もあり収入も随分なもので、豊かで平穏な老後が約束されていたにもかかわらずである。

すでに北海道には、明治二十五年に七男又一が、札幌農学校に入学しており、同二十七年には、石川郡樽川殖民地原野第七線二〇ヘクタール（町歩）の貸付を受け、樽川の関農場は最大一〇八ヘクタールにまで拡大していた。しかしこの農場は入植した小作人たちにまかせ、明治三十四年、さらに北海道の奥地、十勝・釧路国にまたがる、陸別原野（斗満原野を含む）一、三七七ヘクタールの貸付けを受け、同三十九年には、石原六郎、神河庚蔵、三木與吉郎ら徳島関係者の貸付地も含め、開拓許可面積は七、二〇三・六九ヘクタールに及んだという。うち、一、〇一一ヘクタールが同四十二年、寛斎の息子、周助・餘作・又一名義で成功付与を受けている。

同三十五年八月五日、寛斎は妻を残し、餘作とともに札幌を出発、同十日に斗満に到着、開拓に入った。開拓の労苦は『十勝国中川郡本別村字斗満　関牧場創業記事』に語られている。息も出来ないほどの小虫がまといつき、虫害、兎害、熊害に遭い、同三十七年六月、妻の死目にも会えず、「亡き魂よ、ここに来たりて、諸共に、幾千代かけて駒を守らん」と妻の魂に呼びかけ、妻もまた斗満の寛斎とともに骨を埋めることを遺言していた。この年、又一は日露戦争に出征して留守中であったが、原因不明の病気で、次々と飼馬が倒れ、関牧場崩壊の危険に瀕したこともあった。そんな中でも医者として地域の開拓民やアイヌの人たちの治療に出向き、また種痘を施した。

寛斎の願いは、関農場で働く人たちのために各自十ヘクタールを所有する自作農を創成し、彼らとともに積善社と名付ける、モラルを実現する理想的農牧村落を作ろうと考えていたのである。これに対し、札幌農学校出の又一はアメリカ式大農場の建設を夢見ており、さらに、家族間の葛藤、そして自らの身体の衰弱にも耐えられず、大正元年十月十五日、斗満の自宅に亡くなった。八十二歳であった。「身は消えて心は残るキトウスと十勝石狩両たけの間」、寛斎の死後の希望である。

陸別の関寛翁之像▶

▲東金の関寛斎翁之像

徳島の関寛斎先生像▶

斗満北三線十六番関牧場
（鈴木要吾『関寛斎』より）

開拓時の鉄道・港湾事業に圧倒的使用
「久保煉瓦工場」製造の赤レンガ

久保兵太郎
雅号・二飄（一八六四～一九三三）

久保兵太郎は、一八六四（元治元）年、名西郡下分上山村（現・神山町）で、代々醸造と木材の仲買を営んでいた素封家久保栄太郎の長男として出生。

兵太郎の才覚は小さいころから村びとたちの厚い信頼を得ていた。父・栄太郎が村の戸長を辞し商売に戻った際行われた戸長選挙で、意外にも十五歳の兵太郎が当選するほどであった（あまりの若さのため任命はされなかった）。その後役人になるため上京、鉄道局に入った。しかし、それは兵太郎の肌には合わなかった。

郷里を出て同じく鉄道庁の役人となり、鉄道工事用材料の検査官吏となっていた父・栄太郎は、それまでの事業経験からレンガの製造事業を思い立ち、当時地理的条件のそろっていた山梨県に製造工場を設けようとしていた。ちょうどその頃あい前後して北海道炭礦鉄道株式会社（北炭）から、野幌に直営のレンガ製造工場を開設するにあたり、その工場の経営管理者としての招きがあった。一八九七（明治三十）年のことである。このとき兵太郎も北海道に渡り、そして製造所のいっさいの責任をもつことになる。

当時、レンガは、鉄道・港湾などの建築材料として欠くことのできないもので、需要は増加する一方であった。北海道開拓途上において、鉄道敷設は産業・交通の進展をもたらしたが、この鉄道建設に必要なレンガの大部分を生産する好機をつかみ、道内六か所のレンガ工場を経営。地元の人びとはこの工場を「久保煉瓦工場」と呼ぶようになった。さらに、洋風の耐火建築・鉄道機関庫・港湾などの工事材料としてますますレンガが必要になると考えた兵太郎は、東京・山梨・長野・鹿児島、さらに台湾にまでおよぶ全国十数か所にレンガの販売所を設けた。一九〇七（明治四十）年には、久保組の年間生産能力は一千万本に引上げられたといわれる。

また、この工場で働いたのは、地元の人びとのほか元屯田兵やその家族、毎年新潟県などから来る移住者たちであったという。兵太郎は、この人たちにレンガづくりの技術を教え、それが彼らの生活を潤す糧となることを考えていた。また、レンガ製造用の燃料の多くを地元の農家から買い入れるなどして、農家の出稼ぎを防ごうとした。

今日も、北海道開拓の記念碑として遺されている旧北海道庁改築時の赤レンガにも、久保兵太郎の工場でつくられたレンガが使用されている。

"レンガの久保"といわれ全国にその名を馳せた久保兵太郎は、多くの慈善的事業をも残し一九三三（昭和八）年、七十歳の生涯を終えた。

▲野幌煉瓦工場4号登り窯

▲久保煉瓦工場で働く人びとと久保兵太郎（2列目左より3人目）

▲久保煉瓦工場で生産された「レンガ」

（写真／江別市・セラミックアートセンター提供）

隠れた女性民権運動家と北海道移住

中林　ナカ（一八四八～一九三一）

中林ナカは、一八四八（嘉永元）年、海部郡木岐村（現・由岐町木岐）で柿本友太郎の二女として出生。明治初期から中期にかけて、「五か条の誓文」を盾にして「五反ならし」の民権運動に奔走した。また土地均分化の要求にとどまらず、まだ厳然として残る身分制や貧富・職業による差別、男女差別の撤廃を叫んで阿波の各地を同志とともに遊説した。彼女たちは、維新の世に「世直し」「世ならし」による平等な社会の実現を夢みたが、それがことごとく裏切られてゆく現実を見て運動に立ちあがった。

一八八七（明治二十）年を前後にして「神代復古誓願」運動という「世直し」を求める民権運動が高まるが、その運動と中林ナカらの「五反ならし」運動は連動していたといわれる。官憲の弾圧によってこの運動は挫折するが、その後、中林ナカは家族とともに北海道移住開拓の道を選んだ。

明治初年からすでに始まっていた本県からの北海道への移住は、明治二十年代半ばころより毎年千人をはるかに越えるようになるが、中林ナカも一八九五（明治二十八）年六月、徳島から北海道胆振国勇払郡厚真村に移住。叶わぬ「五反ならし」の夢の実現を北海道の未開の地に求めたのであろうか。その後、一九〇六（明治三十九）年九月、天塩国苫前郡初山別村に転住、そして明治四十年二月に「風連別」原野に一万五千坪（五町歩）の未開地を畑目的に開墾するため無償貸付を願い出、翌四十一年一月北海道庁より許可されている。開拓は五か年計画であった。しかし、そのゆくえには筆舌につくし難い多くの苦難が待ちうけていたであろうことが推測できる。身分や貧富の差による差別に立ち向かい理想を追い求めずにはいられなかったひとりの女性とその家族の勇気ある生き方がそこにうかび上がってくる。

中林ナカとそれにつながる人びとのその後の行動の軌跡を追うことは、一個人史の枠を越えて明治期の徳島、ひいては近代日本が抱える課題そのものに迫ることになると考えられる。

中林ナカらの勇気は、結局、明治政府のめざす富国・殖産政策、北海道拓殖計画の礎となって吸収されてしまったとしても、世代を越えて生きることの勇気を後世の人びとに伝えている。中林ナカは一九三一（昭和六）年、北海道で八十三歳の生涯を閉じた。

＊

中林ナカと同志たちが唱えた「五か条の誓文」の解釈の一部

「旧来ノ陋習ヲ破リ天地ノ公道ニ基ズクベシ」
コノ旧来ノ陋習ヲ破リト申スハマズ公家ガ冠直垂（かんむり・ひたたれ）着テ生レルモノデモナシ武士ガ鎧兜（よろい・かぶと）ヲ着テ生レルモノデモナシ、（中略）等シキ人ニ区別セヌヨニスル ガ旧来ノ陋習ヲ破リ天地ノ公道ニ基キマスルト、漁夫ノ子デモ馬方ノ子デモ知識ノ有ル人ヲ世界ニ求メナケレバナラヌ　（以下略）

明治6年頃、阿波北方の同志の女性と政府に陳情、東京で記念撮影。写真右が中林ナカ。（由岐町役場保管）

一八七七(明治10)年	9月	西南戦争の終結		
一八七八(明治11)年	6月		阿部興人、入植地選定のため原文吉と渡道	
一八七九(明治12)年	4月	琉球処分により沖縄県を置く		
	4月	北海道送籍移住渡航手続を制定		
	5月		開拓使札幌本庁、静内郡藍麻製造取扱規則を制定	
	8月		仁木竹吉、開拓使に「殖民ノ儀ニ付願」を提出	
	11月		静内郡目名村(現・静内町)に藍麻製造所設置	
一八八〇(明治13)年			余市郡仁木村において葉藍試作	
一八八一(明治14)年	7月	北海道官有物払い下げ事件		
	10月		鎌田新三郎、有珠郡紋鶴村(現・伊達市)で藍作・製造の指導(一八八三年まで)	
	11月		北海道開拓の目的で興産社を設立し、阿部興人が社長、滝本五郎が副社長となる	仁木竹吉、仁木村に49戸移住(団体長は鎌田新三郎)させる 仁木竹吉、仁木村に12戸移住させる 開進社第五会所(札幌郡下手稲村)に阿波国借地人9戸入植
一八八二(明治15)年	2月	開拓使を廃止し、函館・札幌・根室3県を設置		
	3月		興産社の原文吉、耕夫5名を引き連れて札幌郡篠路村(現・札幌市あいの里)に入植	
	4月		滝本五郎、耕夫17名を引き連れて札幌郡篠路村に入植、払下地280万坪の開墾にあたる	
	5月			仁木竹吉、101戸360余人(団体長は木村嘉長)を余市原野(現・仁木町)に移住させる
	10月		仁木竹吉、開拓使残務係に瀬棚郡原野450万坪の「殖民願」を提出	
一八八三(明治16)年	2月	北海道転籍移住者手続を制定		
	4月		瀬棚郡に23戸入植(以後、明治16~17年に37戸が瀬棚郡に入植)	
	8月	移住士族取扱規則の制定		
			八田楠逸、「停業御届」を札幌県勧業課に提出(静内郡製藍業の実質的終焉)	
			札幌郡篠路村興産社農場において葉藍5反歩の試作	
一八八五(明治18)年			興産社、製造所を設け藍製造に着手	
一八八六(明治19)年	1月	3県を廃し、北海道庁を設置		
	1月	日布渡航(日本・ハワイ官約移民)条約の締結		
	6月	北海道土地払下規則の公布		
	7月	北海道転籍移住者手続を廃止		
	8月			関井善平ら52戸、後志支庁余市郡仁木村に移住
一八八八(明治21)年	9月		大東伊太郎ら21戸80人、瀬棚郡瀬棚村に入植	
	9月			興産社、利子補給の特典を受ける保護会社となる
一八八九(明治22)年	2月	大日本帝国憲法の発布		
	10月		徳島興産社を篠路興産株式会社と改称し、滝本五郎が社長となる	
	11月	奈良県十津川村の罹災民600戸2480余人、北海道に移住		
	12月	華族組合雨龍農場(5万町歩)の設立 殖民地区画の実施	有珠郡精藍組合、設立(一八九〇年解散)	
一八九〇(明治23)年	8月	屯田兵条例の改正(平民屯田兵の実施)	三条実美・蜂須賀茂韶・菊亭修季出資の華族組合農場へ雨龍原野1億5千万坪を出願	

寄書(北地開発)・吉兼甚太郎『普通新聞(8/04)』

北海道移住者の注意 『普通新聞(4/15)』

屯田兵志願者『普通新聞(3/27)』

北海道移住民の困難 『普通新聞(7/20)』

徳島県人の北海道移住関係年表

平井松午作成

年	月	北海道・日本の動向	徳島県人の動向	徳島県人の移住	移住に関する県内の新聞記事
一六〇四(慶長9)年		松前藩の成立			
一七九九(寛政11)年	1月	幕府、東蝦夷地を直轄			
一八〇〇(寛政12)年	3月	八王子千人同心の子弟、鵡川・白糠場所に屯田			
一八〇七(文化4)年	3月	幕府、蝦夷地全島を直轄			
一八二一(文政4)年	12月	幕府、蝦夷地を松前藩に返還			
一八五五(安政2)年	3月	幕府、和人地を除く蝦夷地を直轄			
	3月	箱館ほか開港			
一八六三(文久3)年	6月		岡本文平(のち監輔)、北蝦夷地(樺太)探検のため箱館出発(10月、帰箱館)		
一八六四(元治1)年	4月		岡本文平、北蝦夷地再調査、越年、日本人として初めて北蝦夷地を一周する(11月完了)		
一八六八(明治1)年	4月	明治維新、箱館戦争 箱館府の設置	岡本監輔、箱館裁判所(のち箱館府)権判事となる		
	4月	「元年者」ハワイ移民			
一八六九(明治2)年	7月	開拓使の設置	岡本監輔、開拓使開拓判官となる		
	8月	蝦夷地を北海道と改称	徳島藩、新冠郡を割渡		
一八七〇(明治3)年	2月	樺太開拓使の設置			
	3月	士族移住の開始			
	5月		庚午事変(稲田騒動)勃発		
	10月		岡本監輔、開拓使を依願免官となる		
	10月		稲田邦植に静内郡・花咲郡志古丹を割渡		
一八七一(明治4)年	3月		稲田邦植に新冠郡を割渡		
	6月		稲田邦植旧臣、静内郡において藍の試作		
	7月	廃藩置県			
	8月	北海道の分領支配を廃し、開拓使管轄とする	稲田九郎兵衛(邦植)、新冠郡静内郡、色丹島の支配を解かれる		
	8月			稲田家臣団150余戸、静内に移住	
				稲田家臣団の移住第二陣、紀州周参見沖で遭難(死者110余人)	
一八七二(明治5)年	9月	北海道土地売買貸規則・地所規則を制定	岡本監輔、「窮北日誌」「北門急務」を執筆		
一八七四(明治7)年	10月	屯田兵制度の制定(翌年より士族屯田兵の実施)			
一八七五(明治8)年	1月	樺太・千島交換条約の締結			
	5月	屯田兵198戸965人、琴似村へ入地(以後、明治32年まで)	仁木竹吉、麻植・阿波郡長宛に「北海道渡航ニ付添願」を提出		
	12月		仁木竹吉来道し「北海道藍烟莨妻拡張論」を開拓使に復命		

北海道地名の読み方

愛冠…あいかっぷ
咾別…いかんべつ
有珠…うす
雨龍…うりゅう
蝦夷…えぞ
渡島…おしま
蓋派…けなしば
色丹…しこたん
静内…しずない
篠路…しのろ
後志…しりべし
瀬棚…せたな
空知…そらち
十勝…とかち
利別…としべつ
斗満…とまむ
新冠…にいかっぷ
花咲…はなさき
富良野…ふらの
真狩…まっかり
紋別…もんべつ
勇足…ゆうたり
陸別…りくべつ
倶知安…くっちゃん

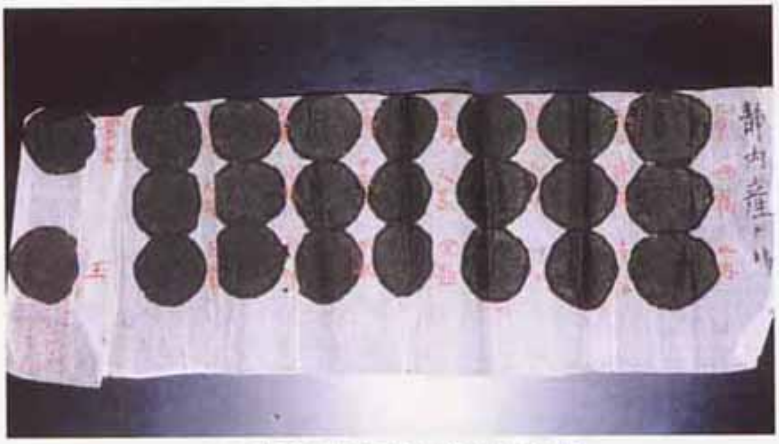
一九〇三(明治36)年				郡オンネナイ原野に入植
一九〇四(明治37)年		日露戦争の勃発(～一九〇五年9月)		徳島県と北海道『徳島毎日新聞(6／24)』
一九〇五(明治38)年	9月	日露講条約により南樺太を領有する	板東農場、合資会社利別農場と改称し、社員に4名を加えて8人とする	
一九〇六(明治39)年	3月		利別農場に畑962町歩(954ha)余、成功付与される	
一九〇七(明治40)年	12月		蜂須賀農場に249万坪の貸付地が許可	
	3月	樺太庁を設置		
	4月	ブラジル行移民契約の成立		
一九〇八(明治41)年	1月	ハワイ移民の停止		阿波団体(原田徳次郎ほか)30戸、空知支庁空知郡富良野原野に入植
	2月	日米紳士協約(アメリカ行移住制限)		
	4月	初のブラジル移民783人出発		木村農場、釧路支庁阿寒郡に開設
一九〇九(明治42)年	10月	北海道の第一期拓殖計画を閣議決定		北海道移住者の注意『徳島毎日新聞(3／08)』
一九一〇(明治43)年	5月	北海道庁、移住民取扱員事務所を設置(青森ほか7ヶ所)		
	8月	韓国併合		
一九一一(明治44)年	3月			北海道移住奨励法『徳島毎日新聞(6／11)』
一九一二(大正1)年	10月		関　寛斎、斗満3線16番地の自宅で死去(82歳)	恵比須団体、上川支庁上川郡上士別村に入植 徳静団体(乾　定太郎ほか)18戸70余人、根室支庁標津郡に入植 徳島団体、十勝支庁河東郡士幌原野に入植
一九一三(大正2)年			阿部宇之八、8代目の札幌区長に就任	北海移民奨励『徳島毎日新聞(4／06)』 北海道移住成功者『徳島毎日新聞(9／20)』
一九一四(大正3)年	7月	第一次世界大戦の勃発(～一九一八年11月)		
一九一五(大正4)年	4月	満州愛川村へ移民入植		徳島団体(田村佐蔵ほか)60戸174人、釧路支庁上川郡久著呂原野に入植
一九一六(大正5)年	6月	ブラジル・ペルー・フィリピンへの移民急増		
一九一九(大正8)年				徳島団体19戸、十勝支庁河西郡大正村上札内に入植
一九二〇(大正9)年	3月	株価暴落で戦後恐慌始まる		
	10月	第1回国勢調査		
一九二一(大正10)年	2月		蜂須賀農場で小作料減免を求め、小作人150余名による暴行事件が発生	
一九二四(大正13)年	5月	アメリカ、新移民法(排日移民法)を実施		
一九二七(昭和2)年	1月	北海道の第二期拓殖計画を閣議決定	蜂須賀農場解放期成会、設立	阿波藍を脅かす北海藍『徳島毎日新聞(5／29)』
一九二八(昭和3)年				解放される蜂須賀農場『徳島毎日新聞(3／03)』
一九二九(昭和4)年	10月	世界恐慌	蜂須賀農場で小作争議が激化(～一九三二年)	
一九三〇(昭和5)年		農村恐慌 ブラジル：外国移民入国制限法		
一九三一(昭和6)年	9月	満州事変の勃発		
一九三二(昭和7)年	9月	満州国成立		
	10月	第一次満州特別農業移民(武装移民)の入植		
一九三六(昭和11)年			勇足農場(利別農場)、農場を全面解放	満州移住本県で十家族『徳島毎日新聞(6／15)』
一九三九(昭和14)年	9月	第二次世界大戦勃発(～一九四五年8月)		
一九四七(昭和22)年			農地解放により、蜂須賀農場全面開放となる	

一八九一(明治24)年	11月	国会開設		北海道に於ける本県人移住の状況『徳島日日新聞(11/08)』
	12月	日本吉佐移民合名会社設立(日本初の移民会社)	永山屯田兵村に徳島県人多数が入植 徳島団体(仮称)70戸、渡島支庁瀬棚郡に移住 那賀郡北海道殖民同盟会組織される	北海道移住奨励広告・那賀郡北海道殖民同盟会『広告』『徳島日日新聞(12/10)』 国安仁七郎氏の移民策『徳島日日新聞(12/17)』
一八九二(明治25)年	1月			移住奨励幻灯会 『徳島日日新聞(1/22)』
	3月	榎本武揚ら殖民協会の発足		又もや移住者の困難・小西回漕店『徳島日日新聞(3/06)』
	5月			関知事の北海道移住策『徳島日日新聞(7/10)』
	12月	『団結移住ニ関スル要領』・『貸付地予定存置制度』の制定		関知事の移住策に関する賛否の意見『徳島日日新聞(7/21)』
一八九三(明治26)年	3月			北海道移住に就て村上知事の注意『徳島日日新聞(7/08)』
一八九四(明治27)年	4月	(海外)移民保護規則の公布		
	8月	日清戦争の勃発(~一八九五年4月)		商会の奸計(移住民の困難、小西回漕店)『徳島日日新聞(4/08)』 守野(為五郎)氏の北海道談『徳島日日新聞(7/18)』
一八九五(明治28)年	4月	台湾、日本に割譲 日伯通商航海条約の締結		北海道移住奨励の悪弊『徳島日日新聞(4/03)』 北海道渡航移住者の混雑『徳島日日新聞(4/20)』 蜂須賀家の農場と北海道移住『徳島日日新聞(12/21)』
一八九六(明治29)年	8月		岡本監輔、「千島義会」を起こす 岡本監輔、択捉島・ウルップ島に至る 岡本監輔、「千島見聞録」を著す 関 寛斎(寛)の4男又一、石狩郡樽川殖民地原野20町歩貸下地を申請	
一八九七(明治30)年	3月	北海道国有未開地処分法の公布	華族組合雨龍農場が解散し、蜂須賀茂韶が蜂須賀農場を創設(原野ほか949万坪、山林900万坪)	宮越農場、上川支庁上川郡に開設
	4月	拓殖務省、北海道移住民規則を制定		
一八九八(明治31)年			興産社の製藍高4万3千貫余に達する	阿波団体数戸、上川支庁上川郡忠別原野に入植 蜂須賀農場、徳島県より小作人21戸を募集 中林ナカ、勇払郡厚真村へ移住する
一八九九(明治32)年	3月	北海道旧土人保護法の公布		
一九〇一(明治34)年	9月		板東勘五郎・小笠原鶴太郎ほか3名、中川郡蓋派原野に600万坪の「予定存置」の許可を得る 北海道の葉藍作付面積1418町歩に達する 関 寛斎、樽川農場を視察(一八九八年にも視察)	増田岩吉農場、石狩支庁石狩郡に開設 友成農場、石狩支庁石狩郡月形村に開設 南海社113戸(~一八九六年)、十勝支庁中川郡咾別原野に入植
一九〇二(明治35)年	4月		阿部宇之八、北海道毎日新聞など3紙を合併して北海タイムス合資会社を設立し、理事となる 関 又一、中川郡達別斗満原野(現・陸別町)300万坪、愛冠牧場500町歩の貸付許可を受ける	
	11月		関 寛斎(72歳)夫妻、北海道開拓のため徳島を出発(翌年6月斗満原野入植) 利別農場で勇足協議会発足	
一九〇三(明治36)年	2月		「利別農場移住小作人規約」定める 興産社、製藍事業を中止 滝本五郎、蜂須賀農場管理人となる 依姫丸移民虐待事件により徳島からの移住者が激減	余市団体(豊村品蔵ほか)22戸、網走支庁紋別郡渚滑村に入植 岩田農場、網走支庁紋別郡に開設 元立江村長の東条儀三郎、小作61戸を率いて蓋派原野の板東農場に入植 阿波・淡路より小作人120戸が蜂須賀農場に入植 阿波団体、後志支庁虻田郡真狩村に入植 徳島団体(仮称)31戸、十勝支庁広尾郡に入植 佐坂農場、上川支庁上川郡に開設 赤井川農業合資会社農場、後志支庁虻田郡に開設
				北海道移住民の増減『徳島日日新聞(2/27)』
				北海道百町歩以上の借地者『徳島毎日新聞(11/02)』 北海道移住勧誘者の来県『徳島毎日新聞(12/24)』
				北海道藍況視察録(一)『徳島毎日新聞(12/06)』
			徳島団体(服部物吉ほか)32戸、上川支庁中川	北海道開墾の栞(一)『徳島毎日新聞(3/20)』

藍作は県人の開拓のよりどころ

徳島ではぐくまれた阿波藍は、稲作の普及する以前の有力な畑作物として県人の北海道開拓の大きなよりどころになった。特に静内・余市・有珠・札幌などでは、さかんに藍作が行われた。

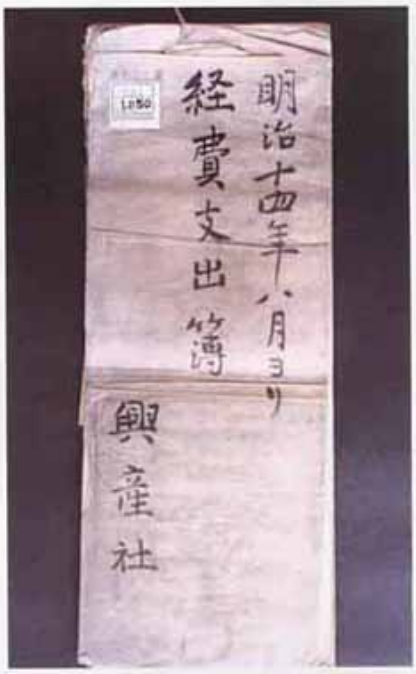
伊達市では現在でも藍作りがおこなわれ、徳島県人の導入した伝統が生きている。



37. 静内郡製藍書類（北海道立文書館蔵）

51. 藍青製社則概畧表（北海道立図書館蔵）

36. 藍染印ばんてん（北海道開拓記念館蔵）



50. 興産社経費支出簿（北海道立図書館蔵）

旧徳島藩主が設立した日本最大級の開拓農場

最後の徳島藩主であった蜂須賀茂韶は、北海道開拓に大きな夢を持っていた。明治二十二年、明治の元勲三条実美らと始めた華族組合農場は三条の死とともに潰える。その後、茂韶はひとり六千町歩を越える大農場を石狩平野の雨竜の地に作り上げた。その農場は日本屈指の小作農場といわれる。

70. 国瑞彦神社扁額（蜂須賀茂韶筆）（雨竜神社蔵）

◀73. 用水路新設工事ニ関スル願届綴（雨竜町公民館蔵）

北の大地に挑む

徳島県は西日本最大の北海道移住県

徳島県は戦前までに七万ともいわれる人びとが移住した全国有数の移住県であった。

北海道の開拓において多彩で多方面にわたる活躍がみられ、ルーツを訪ねて来県する人びともあとを絶たない。

56. 大型鍬〈プラウ〉（北海道開拓記念館蔵）

55. 馬そり（北海道開拓記念館蔵）

◀62. たこ足水稲直播器（北海道開拓記念館蔵）

10. 屯田兵大礼服▶
（北海道開拓記念館蔵）

29. 稲田家静内郡支配中取調書
（北海道立文書館蔵）

14. 稲田家紋入甲冑
（静内町郷土館蔵）

アイヌの人びとの生活と文化

「アイヌ」は「和人」が進出する以前から蝦夷地（北海道）に先住していた人びとである。狩猟や漁労を中心とした生活を営み、自然から学びとった知恵や風俗・習慣・信仰など独自の文化をつくりあげていた。静内は、アイヌの人びとの拠点のひとつである。

4. 神木〈チセコロカムイ〉　5. 神木〈アペフチカムイ〉

9. 飾太刀の吊紐〈エムシアッ〉
3. 飾太刀〈エムシ〉

（静内町アイヌ民俗資料館蔵）

庚午（こうご）事変が徳島からの北海道移住の先駆けに

蜂須賀家の筆頭家老で淡路の洲本城代であった稲田家の分藩運動をきっかけに庚午事変がおこった。この処分として明治政府は稲田主従に北海道静内郡への移住を命じた。静内移住には苦難が待ち受けていたが、その後の徳島県人の北海道移住の礎になっていった。

18. 稲田家紋付杯（静内町郷土館蔵）

▲34. 稲田家所持陣銅鑼（どら）（北海道開拓記念館蔵）

▲15. 卍紋入甲冑（静内町郷土館蔵）

16・17. 木製狛犬（静内町郷土館蔵）

114. 奥羽出張病院旗（徳島城博物館蔵・複製）

▲109. 木製薬研（東金市立図書館蔵）

理想郷を求めた関寛斎

徳島藩主の御典医であった関寛斎は戊辰戦争で活躍した後、徳島の町医者として庶民の治療にあたり尊敬された。明治三十五年、七十二歳の時北海道に渡り、厳寒の斗満の地に開拓の鍬をおろした。理想郷を新天地に求めた壮絶な人生であった。

◀112. 蜂須賀家拝領の手あぶり（東金市吉井直家蔵）

92. ワッサーバード▶（陸別町関寛斎資料館蔵）

93. 寛斎使用医療用具▶（陸別町関寛斎資料館蔵）

全道に展開した県人の入植地

明治十年代になると麻植郡児島村(現・川島町)出身の仁木竹吉をはじめとしての徳島県からの農民移住が相次いで行なわれるようなった。二十年代にはいると、国会議員や町村長などの地域の指導者を中心にした積極的な移住事業が進められ、全道に徳島県人が入植していった。

84. 開拓小屋写真（友成静子家蔵）

◀91. 北海道移住民汽車賃
汽船賃割引券（久米欣之介家蔵）

83. 柱時計（友成静子家蔵）

87. 浄瑠璃見台　89. 袴▶
（本別町歴史民俗資料館蔵）

88. 火鉢（本別町歴史民俗資料館蔵）

■展示品目録（企画展も含む）

番号	展　示　品	備考（大きさmm等）	所　蔵
1	**アイヌの人びとの生活と文化**		
1	着物（刺繍入り）チカルカルペ	1枚	静内町立アイヌ民俗資料館
2	冠　サパンペ	1点	〃
3	飾太刀　エムシ	1本	〃
4	神木　アペフチカムイ	1本	〃
5	神木　チセコロカムイ	1本	〃
6	杯　トゥキ	1杯	〃
7	棒酒箸　イクパスイ	1本	〃
8	花ゴザ　ニカプンペ	1枚	〃
9	飾太刀の吊紐　エムシアッ	1枚	〃
2	**徳島県は西日本最大の北海道移住県**		
10	屯田兵大礼服　上着（9313）ズボン（9314）帽子付き	1点	北海道開拓記念館
11	太政官文書（徳島藩新冠郡分領支配の件）	1点	徳島県立文書館
12	赤レンガ（久保レンガ製）	2点	江別セラミックアートセンター
13	岡本韋庵書軸	1点	個人蔵
3	**庚午事変が徳島からの北海道移住の先駆けに**		
14	甲冑（鎧・兜・面ぼう等箱入り・稲田家紋入）	412×412×535	静内町郷土館
15	甲冑（鎧・兜・面ぼう等箱入り・卍紋入）	410×420×520	〃
16	狛犬・ア形（木製・稲基神社）（941）	310×180×340	〃
17	狛犬・ウン形（木製・稲基神社）（941）	330×180×335	〃
18	杯（稲田家紋付　箱有り、箱に蜂須賀ヨリ拝領と有り）（1110）	15×115×42	〃
19	祝箱（稲田家の箱書き有り）（1598）	305×133×70	〃
20	弊紙箱（稲田家ゆかりの守り札等）（1597）	390×130	〃
21	のぼり旗（稲基神社・明治４年）	2750×350	〃
22	日高国静内郡図（1150絵図）	645×540	〃
23	新冠郡ハタ駆除図（1902絵図）	532×577	〃
24	稲田家戦功記録（1171文書）		〃
25	祝辞（稲田九郎兵衛植久）（1881文書）	677×233	〃
26	覚（久世大和守書簡）（1191文書）	372×4000	〃
27	稲田邦植関係書　二冊之内一（簿書265）	230×160×35	北海道立文書館
28	稲田邦植関係書　二冊之内二（簿書266）	230×160×35	〃
29	稲田家静内郡支配中取調書（簿書267）	230×171×35	〃
30	稲田家静内郡支配中取調書（簿書269）	245×171×38	〃
31	稲田家静内郡支配中取調書（簿書270）	301×210×75	〃
32	稲田邦植旧家来禄高名簿戸籍調（簿書454）	280×208×20	〃
33	開拓使管轄第三大区戸籍之二日高国静内郡（簿書457）	264×191×38	〃
34	稲田家所持陣鍋鐘（旧武岡商店・7190）		北海道開拓記念館
35	木づち（旧武岡商店・71223）		〃
4	**藍作は県人の開拓のよりどころ**		
36	印ばんてん（藍染・旧近藤染舗・HK1397）		北海道開拓記念館
37	十二年以降静内郡製藍書類（簿書3836）	280×197×60	北海道立文書館
38	十二年以降静内郡製藍書類（簿書3837）	295×206×58	〃
39	静内郡製藍売捌書類（簿書5111）	272×195×80	〃
40	余市移民関係書類（簿書3838）	280×201×28	〃
41	小樽郡余市移民一件（簿書3716）	278×200×20	〃
42	仁木竹吉翁遺稿（町指定文化財１号）	125×168	仁木町教育委員会
43	仁木猛義　開拓起源（町指定文化財２号）明治12年	243×162	〃
44	文久三亥年　在京中諸事控帳　阿部氏（091－984）	252×173	北海道立図書館
45	明治二年　日新録		〃
46	明治三年　備忘録（091－997）	257×173	〃
47	明治四年　日誌（091－986）	343×127	〃
48	明治十六年　日誌（091－995）	160×114	〃
49	明治十六年　日記（091－996）	249×170	〃
50	明治十四年八月ヨリ　経費支出簿　興産社（091－1050）	340×131	〃
51	藍青製社則概要表　九年一月　阿部氏草案（091－1043）	242×165	〃
52	藍製之儀二付上願（091－1044）	240×327	〃
53	阿部興人宛井上高格書簡（091－293）封筒有り	165×32	〃
54	阿部興人宛井上高格書簡（091－292）封筒有り	149×56	〃
5	**北の大地に挑む ―開拓期の道具と歴史写真―**		
55	馬そり（15278）	2650×650×990	北海道開拓記念館
56	大型鍬　プラウ（6522）	2700×570×770	〃
57	大型鎌　ササナリカマ（992927）	1290×390	〃
58	大型鉞　サッテ（45253）	350×970	〃
59	大型鉞　ハビロ（9910）	350×100	〃
60	大型のこぎり　木挽（1815）	840×390	〃
61	大型のこぎり　窓（5613）	240×1110	〃

番号	展示品	備考（大きさmm等））	所蔵
62	たこ足水稲直播器（21475）	340×1800×770	北海道開拓記念館
63	薪ストーブ（107074－1～4）	380×540×400	〃
64	石炭ストーブ（107329）	350×390×430	〃
65	ストーブ用湯沸かし（56725）	300×300×390	〃
66	湯沸かし脚（125960）	220×220×430	〃
67	煙突	110×110×860	〃
68	原始林カットサンプル（ヒノキアスナロ・アカエゾマツ・エゾマツ・エゾイタヤ・ミズナラ・シラカンバ）	6点	〃
69	歴史写真	30点	北海道大学付属図書館

6　旧徳島藩主が設立した日本最大規模の開拓農場

70	国瑞彦神社扁額（蜂須賀茂韶筆）	490×1680×320	雨竜神社
71	侯爵蜂須賀農場経営法（B0－48②）	237×162×20	北海道立文書館
72	蜂須賀農場経営法（B0－48③）	268×193×11	〃
73	明治三十二年用水路工事ニ関スル願届綴（2147）	280×180×70	雨竜町公民館
74	写真（蜂須賀茂韶・正韶）	キャビネサイズ	〃
75	明治35・36年土地調査表（蜂須賀農場関係⑦田畑調査１）	280×200×40	〃
76	明治36年土地調査簿（蜂須賀農場関係⑦田畑調査２）	284×196×40	〃
77	明治36年土地調査表（蜂須賀農場関係⑦田畑調査３）	280×196×40	〃
78	明治31年成功地積調査表（蜂須賀農場関係④田畑調査１）	282×196×11	〃
79	明治31年成墾地積調査表（蜂須賀農場関係④田畑調査２）	282×198×10	〃

7　全道に展開した県人の入植地

80	開拓小屋模型	600×600×360	浦臼町郷土資料館
81	石狩郡樺戸郡浦臼村友成農場実測全図（絵図）	1520×920	〃
82	おさ２枚（機織具）箱有り（徳島より携行と有り・箱有り）	410×165×65	〃
83	時計（柱時計・携行品）	620×380×130	個人蔵
84	友成家入植時写真（開拓小屋）	４切サイズ	〃
85	北海道植民同盟規則（文書）	１点	〃
86	小作台帳	３点	〃
87	浄瑠璃見台	１点	本別町歴史民俗資料館
88	火鉢（木製）	１点	〃
89	裃（上下）	１点	〃
90	利別農場小作台帳等（東条家文書）	３点	〃
91	北海道移住民汽車賃汽船賃割引券	１点	個人蔵

8　理想郷を求めた関寛斎

92	ワッサーバード	１点	陸別町関寛斎資料館
93	寛斎使用の医療用具２種	２点	〃
94	関寛斎愛用のカバンとステッキ	２点	〃
95	家紋入りの重箱	１点	〃
96	奥羽出張病院日記１～５のうち２冊	２点	
97	奥羽出張病院日記　処剤録	１点	〃
98	長崎在学日記	１点	〃
99	家日記抄１～３のうち１と３の２冊（徳島関係）	２点	〃
100	朋氏内科書１～４のうち１冊（小杉根邨筆写本）	１点	東金市立図書館
101	奥羽出張病院日記　第三巻	１点	〃
102	虎列刺私考補	１点	〃
103	目ざましぐさ	１点	〃
104	旅行日記	１点	〃
105	陸別町青龍山「関寛翁碑拓本（表）」	１点	〃
106	陸別町青龍山「関寛翁碑拓本（裏）」	１点	〃
107	関寛斎遺品目録	１点	〃
108	「辞世」２首・「死語希望」２首	４点	〃
109	薬研（木製）	１点	〃
110	徳島市在住の関寛に宛てた手紙（台紙貼り）	１点	〃
111	白里寛・扇漢詩	１点	個人蔵
112	蜂須賀家拝領の手あぶり	１点	〃
113	七新薬（下）	１点	〃
114	奥羽出張病院旗（複製）		徳島市立徳島城博物館
115	写真		大塚製薬工場大塚薬報編集部

※期間中展示資料を一部入れ替えることがあります。

展示協力者一覧（順不同・敬省略）

北海道立文書館／北海道開拓記念館／北海道開拓の村／北海道立図書館／江別市セラミックアートセンター／社台町郷土史料館／静内町郷土館／静内町アイヌ民俗資料館／浦臼町郷土資料館／雨竜町／雨竜町公民館／雨竜神社／仁木町教育委員会／本別町歴史民俗資料館／陸別町教育委員会／陸別町関寛斎資料館／友成清子（浦臼町）／篠原一寿（伊達市）／吉井直（東金市）／東金市教育委員会／東金市立図書館／北海道新聞社／株式会社大塚製薬工場／徳島県立博物館／徳島県立二十一世紀館／徳島県立近代美術館／徳島県立図書館／徳島城博物館／由岐町

ご協力ありがとうございました。

文書館開館10周年記念特別展

H12 8/5[土]－8/20[日]

場所：徳島県立21世紀館　多目的活動室

展示配置図

■展示テーマ

1. アイヌの人びとの生活と文化
2. 徳島県は西日本最大の北海道移住県
3. 庚午事変が徳島からの北海道移住の先駆けに
4. 藍作は県人の開拓のよりどころ
5. 北の大地に挑む
6. 旧徳島藩主が設立した日本最大規模の開拓農場
7. 全道に展開した県人の入植地
8. 理想郷を求めた関寛斎

◆同時開催◆

第20回企画展 H12 8/5[土]－10/29[日]

場所：徳島県立文書館　展示室

北の大地に植えられた藍（5月下旬・伊達市）

入場無料

文化の森総合公園 徳島県立文書館

開館時間：午前9時30分～午後5時　休館日：毎週月曜日

文書館開館十周年記念特別展
第二十回企画展
北海道開拓と徳島の人びと
平成十二年八月五日　発行
編集・発行　徳島県立文書館
〒七七〇－八〇七〇　徳島市八万町向寺山
電話　〇八八（六六八）三七〇〇
印刷　原田印刷出版株式会社
〒七七〇－〇〇二一　徳島市西大工町四－一五
電話　〇八八（六二一）二三五六